

映画上映&ラウンドテーブル

核と現代

2008.07.12 (Sat.)

13:00 - 17:30

東京外国語大学 (多磨キャンパス)

事務棟2階 中会議室 (予約不要、入場無料)

13:00 - 14:45 映画上映

『生きてるうちが花なのよ死んだらそれまでよ党宣言』(森崎 東監督、1984年)

休憩 (15分)

15:00 - 17:30 ラウンドテーブル「核と現代」

報告；七沢 潔 (NHK 放送文化研究所)
土佐弘之 (神戸大学)

討論者；米谷匡史／酒井啓子／真島一郎／石田英敬／西谷 修／中山智香子

「テロとの戦争」の後、今度は「核」が米欧による「制裁」の指標とされている。「核」は軍事的にもエネルギー源としても、いまやグローバル世界統治の戦略的争点である。けれども「核」のまばゆい光はひとを盲目にし、「闇」の領域を生まざるにはない。核兵器の凄惨な破壊力だけではない。原発労働、核廃棄物…、「核」には「見えぬ闇」がつきまとい、それを覆う「壁」が作られる。分厚いコンクリートとメディアの「壁」。

沖縄を軸としたアメリカと戦後日本との関係の推移のなかにも、「核」の影が図柄の滲みのように広がっている。沖縄から「核」へ、そして世界統治の現況へ！

「沖縄・暴力論」の延長上に、グローバル世界の「核」をあらためて問い直す。

問い合わせ：東京外国語大学大学院共同研究室

Tel. 042-330-5439 mail. minoda_chisa@tufs.ac.jp

ストルガツキー兄弟のSF小説をもとにしたタルコフスキーの映画『ストーカー』——鉄条網で囲まれ、嚴重に警備された「ゾーン」と呼ばれる広大な立入り禁止区がある。そこには、元来地球にはない未知の物質があり、それを密かに求めて高価で買う連中がいるため、ゾーンに侵入して異物質を持ち出す人びとがいる。それがストーカー（侵入者）だ。

かれらは二重の危険を冒す。まずは不法侵入、そしてゾーンに立入れば得体の知れない感化を受けて健康を害し、かれらの子供はしばしばミュータントになる。けれども、ただ金目当てということではなく、人生の次元を超えたゾーンに抗いがたく惹きつけられ、かれらはそこに不条理な畏怖と敬虔の極を見出している。

核技術はいずれにせよ、人間の生存にとっての「臨界」を画している。自然界の物質の基礎は原子であり、人間の経験的世界を構成しているのはそれである。核エネルギーは原子の鎖を人為的に破壊することで解き放たれる。要するに、人間は核技術によって、所与である「自然」の枠組みそのものを破壊させたのだ。それ以来、自然と人工の区別はない。

人間はあわててこの決壊を補修して「自然」を還元しようとはしなかった。技術への過信からか、あるいは破壊のエネルギーがあまりに魅惑的だったからか、核技術はまず原爆として実用化されたが、それが「文明の利器」だと人びとに納得させるためには、「平和利用」の道も開かれねばならなかった。そして核は、産業化した人間の社会を機能させるエネルギー源として、日常の空間にもちこまれた。

そのときから人間の世界にもはや境界はなくなる。自然と人工の境界だけではない。経験と虚構の境界も、「安全」と「危険」の境界も。核エネルギーはもともとその結果を無化して採り出される。そしてそのために、分厚い「防護壁」が必要になる。

原発事故が起こる。それはたいがい人災だとされる。技術的には「安全」だが、管理がずさんだった、現場の認識がおそまつだったと。けれども、事故が起こるのは現場で働く人びとのせいではない。核エネルギーそのものが人為的で破壊的な「事故」としてしか採り出されないのだ。「危険」は核を扱う技術そのものにある。にもかかわらず、核技術は「安全」だとしなければ原発は維持できない。虚偽と隠蔽の構造はそこから始まる。

(…) 国家は核をもちたがるが、国民には核の実態を知らせず、無知にとどめておこうとする。原発事故は企業利益のためにだけ隠蔽されるのではない。そうではなく、核はもともと虚偽と隠蔽によってしか維持できないのだ。核ほど、国家と人間の利害を対立させるものもない。

(西谷修「金瀬胖写真集『EXPOSED』に寄せて」より)

[映画紹介]



『生きてるうちが花なのよ 死んだらそれまでよ党宣言』

監督：森崎東 木下プロ/ATG配給
出演：倍賞美津子、原田芳雄、平田満、他
音楽：宇崎竜童
1984年 カラー 105min.

旅回りのダンサー、バーバラが飲み屋「波の上」に帰ってくる。ここは「沖縄人民共和国波の上租界」の看板を掲げる沖縄人の溜まり場だ。弟の正は「波の上」の娘タマ枝らと、学校の積立金強奪騒ぎを起こし、担任の野呂を人質にとってきた。そこにバーバラの情夫宮里が美浜から帰ってくる。彼は原発の現場を渡り歩く「原発ジブシー」で、いまはヤクザと関わっている。バーバラは宮里に娼婦のアイコを足抜けさせるよう頼んだが、アイコは原発労働者の安次が忘れられず、美浜に戻ったようだ。アイコを逃がしたことがばれて、宮里は美浜のヤクザに呼び出される。バーバラも美浜に行くが、学校をクビになった野呂は一目惚れしてカバンもちでバーバラについてくる…。

バーバラと宮里は、コザ暴動の手配を逃れ、密航して本土にきた。住民票もない彼らにできるのは、ドサ周りのダンサーや原発労働だ。そして手配師、風俗営業、女たち、それを仕切るヤクザ、つるむ警察…、原発が建つところ必ず現れるという、そんな汚穢の渦に彼らも巻き込まれ、シリアスなドタバタ劇が演じられる。

[報告者紹介]

七沢潔

1957年静岡県生まれ。1981年NHK入局。「いま、原子力を問う」(89年)、「原発立地はこうして進む」(90年、日本ジャーナリスト会議賞)、「チェルノブイリ、隠された事故報告」(94年)、「東海村臨界事故への道」(03年)など、原子力をテーマとした番組他、ディレクターとして多数の番組を制作。現在NHK放送文化研究所主任研究員。著書に『原発事故を問う、チェルノブイリからもんじゅへ』(岩波新書、1996年)、『東海村臨界事故への道』(岩波書店、2005年)などがある。

[参考書籍]

堀江邦夫『原発ジブシー』(1979、講談社文庫、1984)
樋口健二『闇に消される原発被曝者』

(三一書房、1981、御茶ノ水書房、2003)

NHK「東海村事故」取材班『朽ちていった命』(2002、新潮文庫、2006)

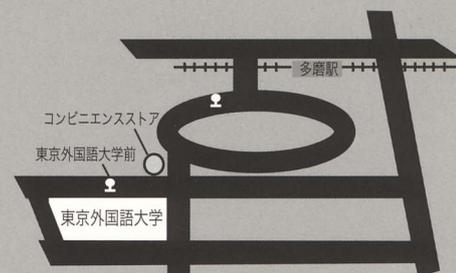
日時：2008年7月12日(Sat.) 13:00 - 17:30

会場：東京外国語大学(多磨キャンパス)事務棟2階 中会議室

問い合わせ：東京外国語大学大学院共同研究室

Tel. 042-330-5439

Mail. minoda_chisa@tufs.ac.jp



西武多摩川線「多磨」駅下車 徒歩5分

京王線「飛田給」駅よりバス「東京外国語大学前」下車徒歩1分